

した。執金剛神の荷造りを終つて手水屋に安置（柳生村南明寺へ疎開を予定）、日光・月光両菩薩の荷造り作業中に終戦となつた。
〔『歴史地理教育』四五号所収、竹内勲「大平洋戦争と奈良の『国宝』疎開」による〕

この間興福寺では、二十年七月奈良博から返還された仏像一九体を吉野山の舟知家に疎開している。法華寺では維摩居士像を大蔵寺に疎開したが、本尊については、これを運ぶ担架をこしらえて防空壕へ避難する準備をととのえ、身をもって本尊を守ることにした。薬師寺では吉祥天画像を円照寺に疎開、他の国宝の疎開を準備中に終戦を迎えることになったが、聖観音像に白金が含まれているので、あわや取りつぶされそうになつたこともあつたという。唐招提寺では開山さんと運命をともしるといって、鑑真和上像の疎開に応じなかつた。

第四節 敗戦と奈良

1 決戦体制下の市民

戦局の悪化
昭和十七年（二〇二）六月のミッドウェー海戦を機に、太平洋戦争は早くもわが国の不利に傾き、

翌十八年二月のガダルカナル島撤退後、戦局は悪化の一途をたどつた。十九年七月、マリアナ諸島のサイパンが占領され、ビルマ作戦も中止のやむなきにいたつた。十一月からは、マリアナ基地のアメリカ空軍による本土空襲が始まり、翌二十年に入ると、連日のように軍需工場と主要都市が爆撃を受けるようになった。二



殉国英霊供養塔

十年一月フィリピンが奪回され、三月には硫黄島、六月には沖繩も占領される。

戦局の進展にともない、中国戦線にあった奈良連隊も新しい戦場に投じられた。遼陽にいた第三十八連隊は、昭和十九年三月グアム島に派遣された（一大隊三個中隊。七月上陸してきた米軍の攻撃を受けて玉砕、敗残の兵士たちは、一か月余り密林をさまよったあと飢死寸前を捕えられた。いっぽう、奈良で編成された三部隊はビルマ（ミャン）に転戦となった。第一三八連隊は、十八年二月シンガポールを経てビルマに向かい、第五十一連隊は翌十九年二月からビルマ戦線に加わった（第一五三連隊に。共には不明。））。共にインパール作戦に投入され、千数百キに及ぶ山岳地帯の難路を進むが、一粒の米、一発の弾丸も補給されず悪戦苦闘、英印軍の反撃にあって多くの戦死者を出した。その撤退にあ

たっても、飢えと病のために無残な最期を遂げる兵士も多数にのぼった（鈴木良編「奈良の百五」）。

日中全面戦争の開始から太平洋戦争の終結までに、奈良県出身の戦死者は約二万六〇〇〇人にのぼり、そのうち奈良市の出身者は五三〇柱を数えた（ただし、新市城の町村を含む。奈良市配量。塔公園の殉国英霊供養塔合祀者数による。）。

市民生活 戦局の悪化にともない、食糧難はいっそう深刻になった。配給される主食の米の割合は減るし、野菜や魚の配給量は低下するいっぽう、その不足は主食以上に深刻になった。昭和二十年（二〇五）を迎えるころには、配給栄養量は生存線を大きく下まわっていたという。『朝日新聞』（奈良版）によれば、六月に奈良公園や平城宮跡を開墾地候補にあげ、春日野運動場を甘藷畑に、正倉

院東側と若草山新道東側に隣組農園をつくる予定がたてられ、七月はじめ平城宮跡はすでに約一三町歩の開墾を終わり、一戸当り七坪の自給栽培を始めていたというが、もとより焼石に水であった。そのうえ七月の閣議で主食配給の一割削減が決定され（大陸からの食糧輸送が不可能になり、二十年度産米の凶作見込が決定的となった）、米の配給が大人一人当り二合一勺（約二〇）に切り下げられた。

すでにほとんどの生活物資が配給制になっていたが、十九年十一月からタバコも隣組配給となり、二〇歳以上の男子（登録された者に限る）一日六本と決められた。大阪地方専売局長から北樞尾総代宛「新聞発表マデハ極秘」とする「煙草割当配給実施要項」が残されている。日常生活物資の配給が少量かつ不規則になるにともない、高値のヤミ取引がひろまり、公定価格も値上げされて物価が上昇、市民生活を圧迫した。にもかかわらずひきつづき貯蓄が強制され、たとえば十九年二期期の、市長から町内会長宛の売出国債・債券消化割当に関する通達に「貯蓄ハ戦力ノ輸血路、銃後ハコノ輸血路ヲ絶ヤサヌヤウ／『右ニ増産左ニ貯蓄』奮ツテ戦力増強ニ挺身シノ勝ツタメニノ勝ツタメニ／最後マデ頑張りマセウ」とある。国債の割当は、市民の肩に重くのしかかっていた。戦争末期、市民生活はほとんど破綻に瀕していたといえる。こうしたなか、一家の働き手はつぎつぎと軍隊にとられていった。たとえば東北町で、二十年一月から七月までに五人が入営（内一人は海軍に入団）、六人が召集されている（町記録）。

なお、ガソリン不足を補うために十九年十月から松根油の採取が始まり（松根油緊急増産措置要綱による）、二十年春には、奈良公園の松にも及んだ。松根油は松の根株または松枝を乾溜して得られる無色の油だが、松の樹皮を傷つけて得られる松脂まつやねからもつくられた。すでに地獄谷の国有林では、十六年から営林署の手で採取が始まったといわれるが、二十年春公園の松木の用材供出や松脂の採取が求められた。これに対し小田成就知事は、「古木の伐採回避を要請したり、松脂採取の傷痕が目立たぬよう採取法の工夫を係官に命じた」という（『奈良史』園史）。六月六日付の『朝日新聞』

(奈良版)に「奈良公園の老松二千本が決戦松脂採取へ応召、奈良市森林組合が主体となり平担部の分から順次採取することになった」とあり、程なく着手されたものとみられる。

罹災者の 昭和十八年(一九四三)の暮れ、空襲に備えて都市疎開実施要綱が閣議決定となり、人員・施設・建
受入れ 物の疎開が実施されることになった。適用地域は東京都のほか一一都市、近畿では大阪・神戸・

尼崎の三市であった。空襲の危険が少ないとみられた奈良は、その疎開先として受入側となった。十九年九月に大
阪市の学童の集団疎開を受け入れたが(第五章第 三節¹)、縁故をたどって疎開してくる人たちもあった。二十年に入って
都市への空襲が激しくなってきたからであろう、東向北町では三月八日の常会で「大阪方面疎開者準備トシ、間数
調査ノ件」が協議事項として取上げられている(「東向北町記録」)。

それから五日後の三月十三日夜半から十四日未明にかけて、大阪が大空襲に見舞われた。被災戸数一三万六一〇
七戸、被災者数五〇万一五七八人(死者・行方不明四六六五人・重傷八五〇人・新傷九阪市史第七卷による)、奈良にも多くの被災者が避難してきた。三月十
八日付の『大阪朝日新聞』(奈良版)はつぎのように書いている。

県下への罹災者は多数に上っているが、(中略)奈良市内にいったん落ちついた罹災者の大部分はそれぞれの縁故先に引きと
られ、旅館の臨時收容所に残った無縁故避難者たちも焦土に彷徨(ほうろう)したきのうの疲れと傷心を忘れ、はやくも雄々しく立ちあ
がり、市に職場斡旋(あつせん)の申込みが続出している。市でも大喜びで重要工場方面の生産戦列に加わってもらうべく手続きをいそ
いでいる。また大阪方面にのこっている無縁故罹災者の集団転入にそなえ、一般民家にも罹災者を割当て收容すべく諸般の
準備を進めており(中略)、一方罹災者への同情も日にたかまり、部屋の提供を申出る民家や寺院、金品の寄贈など相ついで
いる(後略)

避難してきた被災者の援護のため、奈良市が住居や就職の斡旋に努めると共に、米・味噌・醤油・木炭・薪など

の生活必需品の特配を行ったほか、専売局奈良支局ではタバコの持配を行い、奈良警察署では各駅頭に「よろず相談所」を特設し、奈良貸家組合では貸家・間貸しの斡旋を行ったという（『朝日新聞』奈良。またこのとき、旅館四〇数軒は約二〇〇〇枚の布団類を提供したという（同三月付）。

またすでに疎開者のために、県農地開発営団の手で奈良市五条山と北葛城部志津美村（現香芝市）に開墾地が用意され、五条山では約六町歩が開墾されて（開墾を予定）一戸が入植していたが（住宅の建設困難と帰農希望者）、「今後罹災者の帰農には一戸当り二、三町歩の畑が与えられるはずであるから、蔬菜園芸による農業経営で定住することができる」と報じられている（同三月付）。

大空襲のあと大阪市では、三月二十一日から五日間縁故先のない被災者を近府県へ集団疎開させるが（『新修大阪市』、伏見村へ疎開してきた人たちもあつた。『伏見町史』に、「罹災者で縁故のない二〇七名を菖蒲池厚生寮に収容し」、「約一か月の間に知人をたよる人もあつたが、一・二三名は村当局の努力で戦災保護法の救済を申請し、四万七三〇〇円を配分した」とある。

なお六月一日、奈良市にも空襲があつて（後述）、にわかに建物疎開の議がおこつてきた。七月二十七日付の『朝日新聞』（奈良版）に「奈良市内の強制家屋疎開は、下三条・林小路・本子守・北向各町一部で第一回として着手、八月五日までに完了するが、さらに第二次疎開を行うべく目下市内調査をすすめている」とある。しかし、奈良の建物疎開は、実施に移されないまま敗戦を迎える。

戦局が絶望的になつた昭和二十年（一九四五）一月大本営が策定した本土作戦計画に基づき、小磯内閣は三月二十三日「国体護持」「国民総武装」「一億玉碎」のスローガンのもと、「本土防衛態勢

ノ完備ヲ目標」に国民義勇隊の結成を決定した。国民義勇隊は、国民学校初等科卒業業者で六五歳以下の男子および

四五歳以下の女子で構成され、軍隊・警察と一体となって、防空・戦災復旧・疎開・重要物資輸送・食糧増産・陣地構築・兵器輸送などの業務に出動することを任務とするものであった。都道府県毎に国民義勇隊本部（本部長は地方長官）を設け、その指導下に市区町村隊（隊長は市区町村長）を置くことにしていたが、「状勢急迫セル場合」には、一五〜五五歳の男性と一七〜四〇歳の女性が「戦闘隊組織ニ転移」し、軍の指揮下に入るようになっていた（鹿野園町。五月から六月にかけて大政翼賛会とその傘下団体（大日本産業報 国金を除く）が解散されてすべて国民義勇隊に統合された）。

国民義勇隊は、戦闘隊と表裏一体のものとされてきたが、米軍を相手に戦うに足る戦力は全く備えていなかった。国民義勇隊の戦闘方法を教えた『国民抗戦必携』には、「銃剣はもちろん、刀・槍・竹槍から鋤・ナタ・玄能（げんのう）・出刃庖丁・鳶口（とびくち）にいたるまで、これを白兵戦闘兵器として用ゐる」とあり、「格闘になったら、みぞおちを突くか拳（こぶし）丸を蹴る、あるひは唐手（かちて）・柔道の手を用いて絞殺する、一人一殺でよい、とにかくあらゆる手を用ゐて、なんとしても敵を殺さねばならない」と説いていた。なんとも心細い本土決戦体制だったといわねばならない。

奈良市の東向北町では、六月六日午前六時に氷室神社において国民義勇隊結成式を挙げた。隊員は男四一人、女五四人で「東向北町記録」によってその活動のあとをみておこう。

七月八日九日 義勇小隊長召集サレ、右両日午前七時二十分、鼓阪国民学校集合、義勇隊訓練参加、午後五時マテ義勇隊基礎訓練教育ヲ受ク

七月 十六日 義勇隊並ニ戦闘隊特別隊名簿作成、奈良市義勇隊本部へ提出ス

七月 十七日 義勇隊出動命令ニヨリ七名出動ス、春日山松根採掘、一人責任量二十貫

七月 十九日 婦人義勇隊出動、午前六時集合、野崎絹子隊長引率ノ下二十一名柳本〇〇方面へ出動サレ、此日敵機来襲機

銃操射ヲサレ、危険侵シ勤労目的達シ一同午後五時無事帰町サル

七月二十二日 義勇隊出動女子部十一名、午前六時集合柳本〇〇方面へ出動サレ、敵機グラマン・P 51等ノ来襲、危険ヲ侵

シ出動二行十一名、午後五時無時帰町サル

七月二十九日 義勇隊出動男子部一行四名(中略) 奈良市油阪一丁目元南都自動車大阪陸軍需品支廠奈良集積所へ出動スル

八月 三日 義勇隊女子部出動十一名、午前六時集合柳本〇〇場へ出動(中略) 午後七時一同無事帰町セリ

八月 十一日 義勇隊男子奉仕五名、午前六時半町内出発、鼓坂国民学校集合〇〇方面奉仕、午後五時一行無事帰町ス

右によると、義勇隊は男子部と女子部に分かれ、松根油の採集や柳本飛行場の建設整備工事、軍需工場などへの勤勞奉仕を行ったことが知られる。

なお、七月下旬、正倉院御物を構内の倉庫と博物館の収蔵庫へ疎開するため、南市町などの市内の国民義勇隊が出動している(『奈良日日新聞』昭和二〇年十一月二十四日付)。

2 空襲と敗戦

防 空 壕

すでに述べたように防空演習は早くから行われていたが、戦局の悪化にともない空襲の危険が増大、昭和十九年(二〇四區)を迎えて、奈良でも防空壕の築造が急がれることになった。

太平洋戦争開戦前の十六年一月、大政翼賛会市支部理事嶋田常次郎が、繁華街における防空壕(い〇坪から一五坪ぐらの地下壕)の築造を提案したというが(『奈良新聞』一、一月十三日付)、これが実行に移されたかどうかは疑わしい。十九年三月、奈

良警察署は管内市町村長会議を開き、「奈良市内では各戸に少くとも一個の防空壕待避壕を構築することを決定、早速奈良市では各町内会長、警防団長を集めて各所に模範待避壕をつくる、これを見倣なまっておそくとも今月中に各



鳴川町の防空壕づくり

戸一個以上五人乃至十人の家族が楽に待避できる壕を構築すること」になった（同三頁）。

これをうけて春日野町では、三月二十九日、町の待避所をつくるため、奈良公園の一角を借用したい旨、県に願ひ出ている。これによると、工事は警防団の指揮で町民の勤労奉仕で行うとしている。鼓阪警防分団長の五月二十七日の町内会長宛通達に「隣組各家庭ニ相当数ノ待避所ノ構築ヲ見タルガ」とあって、防空壕の構築がすすんでいくことがうかがえる。ところが、つくりっぱなしで水がたまったり盛土が崩れたりしたものが多かったらしく、空襲時の利用に遺憾のないようその整備を要請したのがこの通達で、併せて「公共待避所」「何人用待避所」などの標識をたてるよう望んでいる（春日野町 有文書）。この年奈良公園内にも、春日奥山の松木を使って県庁職員用の防空壕が掘られたという（「奈良公」 園史）。

鳴川町には、かなり本格的な防空壕がつくられていた。平成四年（一九九二）奈良市音声館建築のため発掘調査中に発見されたもので、東西約七畝、南北約二・五畝、深さ約二・五畝の長方形の地下壕に型枠を組み、コンクリートを流しこんだ堅固なものであった。町内の人々の話では、昭和十九年に青年会が中心になってつくったもので、各家庭でも庭や畑に人がかかんで入れる程度の小さな壕をつくったという。

もちろん学校では、どことも防空壕がつくられた。奈良師範学校女子部では、十九年四月二十八日に「防空壕・遮光幕作業」、八月十四日に「防空壕掘り」を行っており、佐保国民学校では戦争末期に運動場の半分を「さつまいも畑」にし、

校舎側に軍隊と学校兼用の防空壕をつくり（『奈良教育』、『奈良中学校でも終戦末期に防空壕をつくったことなどが知られる（『奈良県立奈良高』、『等学校五十年史』）。

六月一日の 奈良市にはじめて空襲警報が出たのは、昭和十九年（一九四四）八月十一日のことだった（『蔵日記』）。
空襲 十一月下旬から、マリアナ基地の米空軍B29による本土空襲が始まった。明けて二十年から、大阪

は連日のように少数のB29による爆撃を受け、三月十三日―十四日には大空襲に見舞われた。十七日神戸も大空襲を受けその後艦載機の阪神地区への来襲もあった。六月一日、B29の大編隊五〇九機が大阪に来襲、午前九時二十八分から十一時まで焼夷弾による無差別爆撃を加えた（『新修大阪市』、『史』第六卷）。第二次大阪大空襲である。マリアナ基地に帰投する編隊が奈良近くの上空を通過、そのうちのB29一機が一条通り沿いに焼夷弾を投じた。単機とはいえ奈良への初めての空襲であった。帰りの置土産に落としていったといわれたが、興福院に設置されていた同盟通信奈良支局（油阪町に所在）の警報発令下用の無線機を狙ったのだという噂も流れた。

これについて「東向北町記録」は、

六月一日 午前八時ヨリ十時半ニ大阪大空襲、米B29四百機来襲、北大阪市都島曾根崎天満十三福島築港方面空襲セリ、相
当損害アリ、奈良市ニ於テは法蓮町に五十疋焼夷彈落下六ヶ所炎上セリ、負傷アル、中には死亡者モアル。

同日法華寺町にも五十疋焼夷彈落下、二ヶ所炎上セリ、奈良市於て初めての空襲である。

と書きとめ、東大寺の「日誌」には「大阪空襲第二回目にて今回は昼行はれたり。敵機は大阪に投弾して後吾が奈良上空を通過脱走するコースに在り。切齒徒らに憤激するの状態なり。本日友軍機一機三笠山奥墜落」とある。

そのとき焼夷弾の直撃を受けて家を失った濱田三重子（旧姓奥本、当時一三歳）さんは、忘れられない思い出としてつぎのよう

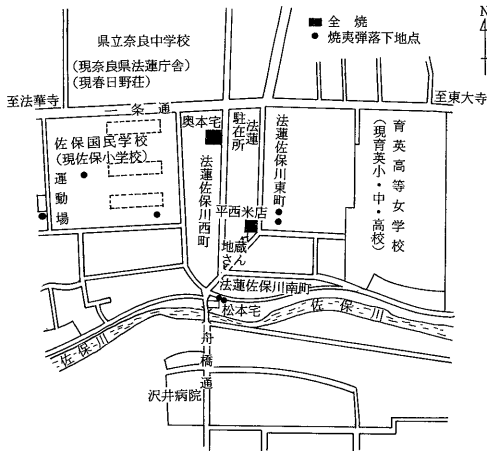
家は法蓮佐保川西町九七二番地、当時父は動員学徒の引率、兄は軍隊、弟は動員で留守、その日は母と妹二人と警戒警報で学校（女高師附）から帰宅していた私の四人がいました。十二時前だったでしょうか、「きれいやなあ」と思いながらB29の編隊を眺めていたところ、大きな音がしたと思った一瞬、視界が黄色と灰色と茶色に変まりました。振り返ると家から火が出ているのです。母が飛び出してきました。顔は真黒、着衣に火がついています。母は玄関わきの防火用水をかぶってこれを消しとめましたが、爆弾の破片で足をえぐられ、火傷をおっていました。母のあとを追って出てきた妹も、額から血を流し、火傷をしていました。下の妹は近所の人と黒髪山へ避難していて無事でした。あとで母に聞くと、焼夷弾が庭石に落ちて炎をあげ、爆風で倒れた障子に燃えついたということでした。

私は妹をひっぱって裏の佐保国民学校へ行き、傷の手当をしてもらおうとしたのですが、誰も何もしてくれません。沢井病院へ走りました。母も近所の人の介添えで病院へ運ばれましたが、ほうたいを巻いてくれただけ。二か月ばかり入院することになりました。

家は、蔵と前の塀が残っただけで全焼、家財道具もすべて焼けしまいました。

また、法蓮佐保川南町の松本愛子さん宅の横の道にも焼夷弾が落ちた。松本さんの話では、破片がとんで裏に積んであった松葉や木ぎれに火がついたが、近所の人の応援で消しとめ、大事にいたらなかった。佐保国民学校の運動場の真中と相撲道場

図1 法蓮町被害図（後呂忠一作成）



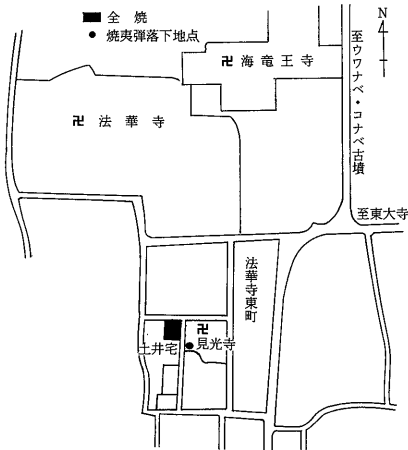
側にも焼夷弾が落ちたが、「佐保川の水をバケツリレーしたりして消し」とめ（佐保小学校「創立七十周年記念誌」、運動場西側の民家や佐保川東町の平西米店付近の民家などにも落ちたが、消火活動が功を奏して一部を焼いただけですんだという。しかし平西米店は、焼夷弾が落下して家屋が全焼したうえ、同店の小学校一年生の少女が大火傷を負い、沢井病院で命を失った。この日の空襲で、法蓮町では二戸が全焼、死者一人、重軽傷者二人の被害があったことになる。

「東向北町記録」には「六ヶ所炎上」とあり、「大東亜戦争戦災被害状況概見図」（昭和二十年十二月、復員資料課。鈴木良編「奈良県の百市分とみ」）には住宅の全焼四、半焼三としているが、これを裏づける伝聞や史料はなく、同図も焼失区域として二ヶ所に印をつけているだけである。

この日法華寺東町にも焼夷弾が投下された。「東向北町記録」に「二ヶ所炎上セリ」とあるが、町内の人びとの記憶では、全焼したのは土井富蔵氏が住んでいた辻本菊松氏の借家で、隣家の杉本氏宅の軒下も焼けたのだという。いまわかつている当日の確実な被害箇所は図1、図2のとおりである（焼夷弾落下地点は聞取）。

ところで、さきの「戦災被害状況概見図」によれば、六月十日にも空襲があつて法華寺東町で二戸全焼したことになるが（焼失区域として一ヶ所に印を付けているだけである）、これは六月一日のことを誤ったものであろう。同町見光寺の住職日首溪さんが、動員先の愛知時計から六月六日に帰宅したとき、焼夷弾で離れの板壁が焼けていたというし、内山トシエさん

図2 法華寺東町被害図（後呂忠一作成）



も、法華寺東町に爆弾が落ちたのは、法蓮町と同じ日だったと記憶している。それに「東向北町記録」も、「同日（六月一日）法華寺町にも五十疋爆弾投下」としていて、十日の空襲についての記載はなく、ほかにもこれを伝えるものはない。なお、マリアナ基地B 29部隊の「作戦任務要約」によっても、近畿地方へのこの日の出撃は皆無である（小山仁三訳『氷庫日本空襲の全谷』マリアナ基地B 29部隊）。法華寺町の空襲は、六月一日であって十日ではなかったとみるべきであろう。

六月二日付の『奈良日日新聞』は、この日の空襲について記事をのせているが、「何ものも恐れぬ市民の奮闘が遺憾なく發揮された」と消火活動を誇大に報ずるのみで、投下地点、被害については全くふれていない。「民家へ爆弾が落下したが、隣組のバケツリレー、育英高女生一年二年が直ちに現場に出勤、奈中生・青年学校生も憤怒のまなざしも凛々しく即刻かけつけ猛然と火をふく家中に挺身突撃し、所嫌はずおちくる火の粉をものかわと注水作業に敢闘、頭の毛はちぢれ、顔は煙のために真黒になり目もあけられぬ。猛火との取り組みは決戦下戦ふ学徒の真面目を遺憾なく發揮した」などと書いているが、実際には、学校警護のため待機していた奈中生一〇名ばかりが学校前の奥本宅に駆けつけ、近所の人とともに菰川の水をバケツリレーして消火にあたったが、火の手が大きくて消しとめられなかったということである（島田彰治・長）。戦意高揚のための勇み足というべきか、当時の新聞の姿勢をうかがうことができよう（軍事機密のためか、他紙。には空襲の記事がない。）。

その後も敢奮的に艦載機の来襲があり（八月上旬と十四日に『奈良日日新聞』社屋と国鉄奈良駅に機銃掃射があり、八日東大寺三月堂の仏像を正暦、寺に疎開中帯解駅で機銃掃射を受けたという。また現白藤学園や国鉄奈良駅の機関庫に弾痕が残っていた。）県下各地にも小規模な空襲があったが（鈴木良編、前掲書）、奈良は大規模な空襲を受けることなく終戦を迎える。

敗 戦

昭和二十年（丙午）沖繩戦の敗北が決定的になると「本土決戦」「一億玉砕」が声高に叫ばれるようになつたが、もはや日本は戦争を続ける力を失っていた。七月下旬からは、ほとんど毎日のように中小都市が焼きはらわれ、県下各地への艦載機の来襲もひんばんになった（鈴木良編『奈良の百年』）。八月に入って広島

と長崎に原子爆弾が投下され、九日にソ連が参戦、十四日ついに日本の降伏を要求したポツダム宣言の受諾を決定八月十五日、天皇のラジオ放送(放送)をもつて国民にこれを発表した。

「東向北町記録」には、「此日ラヂオにて天皇陛下玉音放送を拝し、町内一同正午を期(し)謹聴ス、大東亜戦争ニ関シ、四国米英支ソ申出ニ受諾の大詔ヲ拝シ奉リ一同感無量」とあり、東大寺の「日誌」は、つぎのように書きとめている。

正午十二時放送に際し、畏くも聖上陛下の玉音にて戦争終結の悲愴極まる詔書の御奉読を拝す、烈日は街に白光をさんさんと降らし注げとも、御詔書を拝聴する我等の心のいかに暗かったことか、これから襲ひ来るであろう前途の苦難に心を痛めたからでもある。然し畏きこと乍ら、御詔書を垂れさせ給ふ御叡慮のほどを拝察され、我等の前途はどうあろうと問題はないのだ、あゝ、大御心を拝察すればあふれ来る暗涙止め得ず、我等は唯々慚死の思ひに身をせめるのみである(後略)

そして、翌十六日「昨日に引続き沈鬱する空気に満ち、道行く人の顔上にも生氣と笑とが影をひそめたるが如き感あり」と、市民の虚脱のさまを伝えている。

「東向北町記録」によれば、二日後の八月十七日、緊急町内会長の召集があり、佐保国民学校に集合、連合町内会長の説論にしたがって「町民ニ対シ冷静且団体護持ノ精神(神)で困難ヲ凌ギ国家再建に努力センコトを誓約」、東向北町では翌十八日臨時緊急常会を開いてこのことを約し合つたという。団体護持が当時の支配層の最大の関心事であり、その国民への徹底をはかったことがうかがえる。戦争が終結したにもかかわらず、その日町内の一人が心白「祈願ノ為水室神社春日神社参拝」とある(ただし「即日帰郷サル」とある)。

また、東大寺の「日誌」八月二十五日の条につきのような記事がみえる。

朝六時大鐘撞初め式、管長已下塔中出仕、数年間音響管制にて停止の梵鐘を打撞き、再起日本黎明之警鐘として意義あら

しめんため、大朝（『朝日新聞』）に談合の結果之を挙行、今晚より引続き毎夕初夜之鐘を聞く事となり明朝の気分を味う。
（後略）

という記事がみえる。不安と混乱のなか「明朝の気分」にはまだ遠かったにしても、市民もまた、戦争の重圧から解放された喜びを感じはじめたのではなからうか。

文化財と 敗戦後の混乱のなか、疎開中の国宝の帰山がはじまった。東大寺の「日誌」によれば、昭和二十
 ウォーナー伝説 年（西暦）十一月九日、円成寺に疎開中の三月堂四天王像のうち二体が帰山、十一月十六・十七

両日に正暦寺預け分が帰ってきた。金剛・密迹両仁王像の破損が判明したのは、このときである。ついで二十七日から二十九日にかけて大蔵寺に疎開していた西大門勅額などが戻り、東大寺では十二月十三日に三月堂疎開仏像の開眼法要を行った。

このころ、京都と奈良が空爆をまぬがれたのは、ラングレン・ウォーナー博士（日本・東洋美術の研究家、終戦前後ハバロド大学附属フォックグ美術館東洋部長）のおかげだという話がひろまった。十一月十一日付の『朝日新聞』が、「作戦・国境も越えて／人類の宝を守る／米軍の陰に日本美術通」という見出しで、「美術と歴史を尊重するアメリカの意志が京都と奈良を、人類の宝」として世界のため日本のために救ったのである」として、ウォーナーの尽力をたたえたのが発端だったという。以後マスコミに取り上げられ、文化の擁護者アメリカの宣伝材料の一つとしてウォーナー功績説がひろまった。ウォーナーは翌昭和二十一年、GHQの民間情報教育局の美術保護主任として来日、数か月の滞在中（五月二十六日来寧、翌日博物館、京都・奈良を救った「恩人」として歓迎を受けた。当のウォーナーは、自分のせいでないことを強調したが、これがかえって奥ゆかしい謙遜と受けとられ、ウォーナー功績説はいっそうひろまった。さらに、二十四年一月の法隆寺金堂火災についてのウォーナーの談話と哀悼（ポストン博物館で金堂壁画の実物大写真、真に黒いリボンの花輪を飾ったという）の報道や二十七年に来日したウォー

ナーへの吉田首相の感謝によって、その伝説は増幅された。三十年六月彼が死去すると、奈良県議会は全員で黙禱して弔電をうつことを決議、翌月、奈良県・奈良市合同でウォーナー博士追悼法要を営んだ。三十二年には安倍文珠院にウォーナー報恩塔がつくられ、ついで法隆寺にもウォーナー塔が建てられる。昭和五十七年（一九六二）発刊の『奈良公園史』も、「奈良の恩人ウォーナー博士」として「奈良や京都は米軍の空爆をまぬがれた。両文化都市に対して米軍の特別の配慮が払われたことが戦後ぜんじ明らかとなった。この空爆回避の恩人としてウォーナー博士が知られる」と書いている。

しかし、こうした主張を裏づける根拠はない。太平洋戦争中ウォーナーが日本の文化財についてしたことは、「戦争地域における美術館及び歴史的記念物の保護及び救済に関するアメリカ委員会」(ロバート委員会)の一員として、文化財リストの極東とくに日本の部作成の中心になったにとどまる。それは、彼自身がくりかえし強調したところでもあった。それに基づいてつくられたとみられる日本の文化財リストと地図が、二十年五月作成の「陸軍サーピス部隊便覧」にのせられているというが、これによって爆撃目標から奈良・京都の文化財がはずされたという証拠もない。ましてウォーナーがそのことを進言した事実もないし、かりにそういうことがあったとしても、戦略が変えられるものでもあるまい。京都は原爆投下の候補都市の一つにあげられていたのだし(六月二十六日西陣、地区が爆撃された)、奈良にも六月一日、法華寺の近くや東大寺大仏殿から約一・七キロの地点に焼夷弾が投下され、艦載機の機銃掃射もあったのである。ウォーナー功績説の発端となった『朝日新聞』の記事の出所は占領軍で、「歴史を尊重するアメリカ」を宣傳するために流された疑いが強い。ウォーナーが奈良・京都を空爆から救ったというのは、戦後につくられた伝説としなければならない。

では、奈良が大規模な空襲をまぬがれたのはどうしてか。奈良には軍事施設や軍需工場などアメリカ空軍が攻撃

目標とするに足るものがほとんどなかった。二十年当時、奈良には歩兵第三十八連隊のあとに入った岐阜陸軍整備
学校奈良教育隊（少年飛行兵の短期養成を目的に昭和十九年四
月一日に開隊、『奈良航空教育隊』による）しかなく、県下でも、いまの天理市に近畿海軍航空隊大和基地
（柳本飛）と奈良海軍航空隊（天理教語
所）が在營（行場）があったほか、五條市北宇智に大阪兵器廠の燃料倉庫が工事中だったにすぎ
ない。太平洋戦争直前のことだが、日本の軍部は奈良について「宮内省関係地方トシテ防空上第一位ニ属スル安全
地帯ナリ」としていたのであった。奈良の空襲が小規模かつ散発的だった最大の理由は、攻撃すべき軍事目標がな
かったからである（鈴木良「太平洋戦争と文化財」『ウォーナー伝説』をめぐって、木村。
博「退官記念会『地域史と歴史教育』所収による。詳しくは同論文参照）。